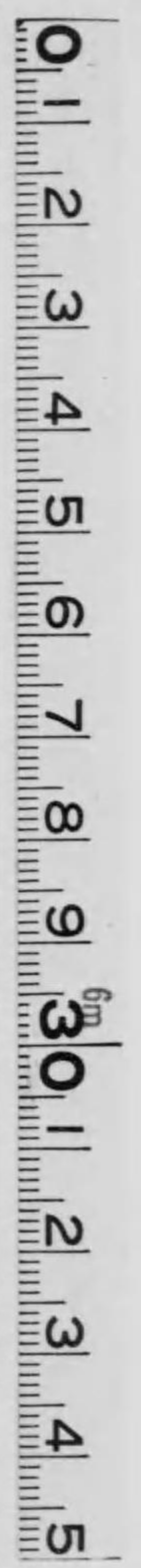




11
596

狂言百番



始



狂言百番 上

11
196



11-596

序

畫家が畫を成して形似の上に成功するは易い、是に依つて暗昧者を魅する事も易いのである。而して多くの畫家は、この程度に安んじ、又足れりとして居るのである。然し對象の内面に喰入り、對象即ち自我の境地に入つて之を表現するに於て、初めて眞の繪畫を成す事を得るのである。栖鳳の巧なるは是が爲である。春舉の偉きは是に存する。而して山口蓼州君の狂言畫に於ける、嚴父の教養と茂山氏の董陶とに依り、其濫奧秘術を理解し之を彩管に托するのであるから、狂言なる古典時事物を描いて、而も夫に生命あらしめ得るのである。今日狂言畫に於て君は第一人者と言つてもよからう。夫には本書を見る人に等しく異存を挟む餘地はあるまい。

大正辛酉初冬

村上 文 芽

大正
11. 9. 22
内文



花子作

花子「花子はあさしや」



通 園 「扱も宇治橋の今こをよと見へし所に」

東海舟



御田 「つら憎い男の云ふた事の腹立」



三
番
叟



末廣がり

傘をさすなら春日山く

人が傘をさすなら我も傘をさそよ、



福の神

楽しうなさては

かのをまじ



大黒連歌

大黒連歌の面白さに、



狸
腹
鼓



東山作

釣

狐

ク
シ
く
く



釣 狐
ク
ワ
イ
く、



福部の神

納まれるく

都の春の鉢たき、



止動方角

はて先きへうせいと云ふに、



鼻取相撲

相撲はこう取る

ものじやいやい、



居杭

あーいたくく、



腰 祈

いつまで此ように

して居るのじゃ



文
荷

實にも命ぞ唯頼め、



石
神
樂、



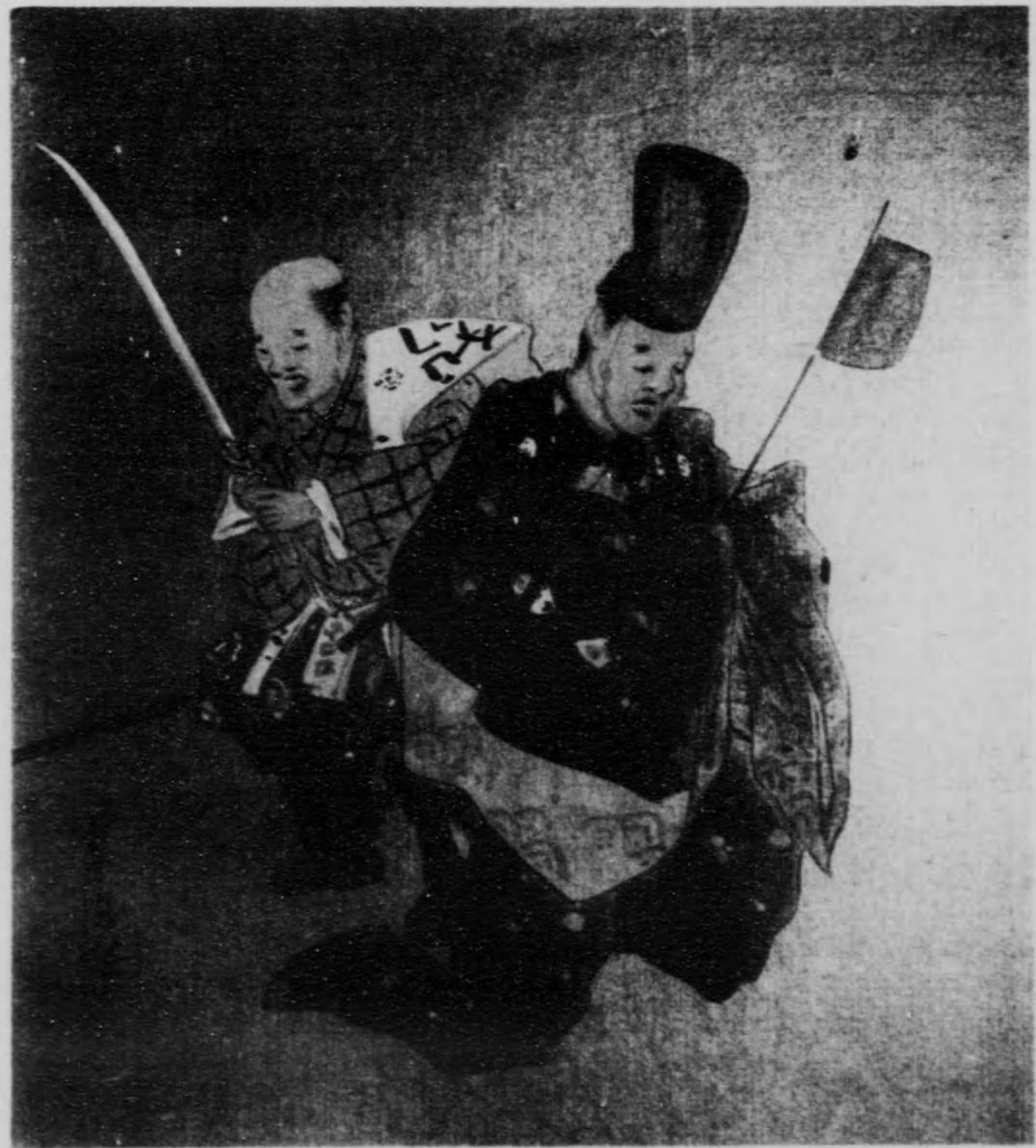
宗論

なまうだ

れんげきやう、



彌宜山伏
再拜
ホロン



昆布 賣

若狭の小濱の召の昆布

このシヤキヤ〜、



膏 藥 煉

ソリヤスエ〜

スワレワセス〜



佛

師

佛
じ
や
く



棒
縛

是非に及ばぬそちに飲いでやろう

なに身共に飲いでくるゝか



伯母ケ酒

先おごいてやろう

ヤイ已れこちらを

見よるまいぞ、



萩大名

おつけ申そう、



二九十八

されば對面の致そう、



業平餅

あら恨めしの

餅やとて、



惣 八

南無三魚頭をつぐ、



千鳥

濱千鳥の友呼聞は

ちりくやく



鈍太郎

これは誰か手車

鈍太郎殿の手車、





財寶

釣する所に釣た所が

面白いの、



靴 猿

ハリー一の幣立て

二の幣立、



靴 猿

なを千秋や萬歳と
俵を重てめんくにく、



素袍落

いたゞきやつれた

小原木、



素袍落

身共の機嫌のよしも此ような

素袍をもろをて御座る、



布施無經



小唄入

狐塚

のんぼり下りの

舟ひくホイ〜



右近 左近

私は當所に住いする

右近と申お百姓で御座る、



瓜 盜 人

行かんとすれば引とむ

留れば枝にてチャウト討つ、



墨

塗

ヨ
ヲ
!



佐
渡
狐

尾はふつさりと

太う長いものじや、



附子

たゝ喰へく、



魚 說 經

先づ 說法を

するめなり、



因幡堂

イヤ是によねんものう

ねている已喰さいてやろうか

引さいてやろうか、



蚊相撲

これきた

あをげく、



木 六 駄

左 せ い ほ う せ く

ち よ う く



井 碯

ヤイ菊市はよう

渡さぬかいやい

ヤットナク、



千切木

巳れ内に居よつたならば

此棒で打はたいてくりやう物を、



柿山伏

ピーヨロ〜〜

なんじやピーヨロ〜〜



關罪人

急げく、



雷

降つてらいつく

八百年が其間、

11
596

大正十一年二月十五日印刷
大正十一年二月二十日發行

不許
複製

發賣所

發賣所

編輯者 山口 蓼洲

印刷者 京都市寺町通二條南入十九番戶
山田直三郎

美術書肆 合名 芸 堂
京都市寺町通二條南入

美術書肆 合名 芸 堂 支店
振替口座大阪二五八番 電話晨上三百四十四番
東京市本郷區湯島一丁目一番地 電話上三八二四番

電話下谷七五三〇番
振替口座東京四〇九四〇番



11
2
196

終

